

2011年10月22日
東西学術研究所創立60周年記念国際シンポジウム
(関西大学以文館4F セミナースペース)

基調報告

— 東西文化交流 —

東西学術研究所の新たな未来へ

東西学術研究所所長
所長 松 浦 章

『東西学術研究所々報』第1号の研究所紀事によれば、1951年4月14日に東西学術研究所が設立され、開所式を行い、石濱純太郎先生、高橋盛孝先生、壺井義正先生、三上諦聴先生により研究活動が開始されたことが記録されています。それから60年の歴史を重ね、東西学術研究所は発展してまいりました。

その研究するところは、東洋、西洋の文化の学術研究、特に比較研究であり、世界文化の融合に貢献すると言う目的のために、第1部は東洋、第2部は西洋を中心とする研究組織で、大きな改変も無く今日まで続けてまいりました。

特に「研究叢刊」を初めとする出版物は優に100冊を越え、近年は関西大学当局のご理解を得て、毎年数冊の専門研究書を出版する状況になっております。そのような成果を基盤にしてアジア文化交流研究センター、G-COE 関西大学文化交渉学教育研究拠点、さらにアジア文化研究センターへと展開してまいりました。その歩みの一端は、研究所の事務当局の方々の努力によって作成された170頁に及ぶ『東西学術研究所60年の事蹟』に網羅されております。

関西大学東西学術研究所は、この60年間、専任の研究員を有せず、研究員は関西大学の専任教員の兼任によって運営して参りました。その趣旨は、研究を教育に還元すると言う深意があったものと思われます。近年の文部科学省の意図するところも高度な教育には高度な研究の裏付けを必要とするものであり、必ず教育に還元できる研究が強く求められることが顕著な傾向と言えるであります。

60年前に東西学術研究所が創設された経緯は、大坂の私塾泊園書院の蔵書2万冊の寄贈を受けたことに起因し、研究所が設立され、関西大学における東西両洋の学問研究が開始され、教員の質的向上を大いに高める契機になったことは、歴史的に見て間違いのないものと思われます。

それでは、そのような先学の努力の蓄積を受けて、後輩の我々が次代の人々に何を受け継ぐことができるであろうかが問われるところではありますが、その答えの一つとして、今回の記念事業の一つとしてまとめられた記念論文集を掲げることができるでしょう。東西学術研究所に関係された28名の関西大学の現職教員が、教育活動のなかでまとめられた成果が結集しているからであります。我々大学人は、研究と教育とが両輪として活動しなければ前進することができないでしょう。高度な研究が高度な教育を生み出すことが、強く認識される時代になって参りました。その意味で、今後の東西学術研究所も、多忙な教育活動の中から生み出された成果が、新たな研究所の歴史を積み重ねる最大の要因となるものと思われまます。

さらに、東西学術研究所の研究活動に古くから御理解を頂き、研究所の成果を待ち望んでおられる研究者を今回の記念講演にお願い致しました。

中国から寄稿頂いた上海・復旦大学の周振鶴教授は、御講演のテーマにもありますように、漢籍を書誌学的にも文化史的にも新たな角度から探求すると言う視角を提示していただけるものと思われまます。

近世近代の日中の思想交流に造詣の深い台湾大学の徐興慶教授は、幼少期に大坂で大塩平八郎のもとで学んだと言われる阪谷朗廬の学問と新思想への進展を新たな視座から探求されるでしょう。

古英語・中英語・中世アイルランド語・中世ウェールズ語の言語と文学に精通され、著書 *King Alfred's Old English Prose Translation of the First Fifty Psalms*, 2001. によってロンドンのブリティッシュ・アカデミーより名誉ある Sir Israel Gollancz Prize 賞を受けられたアメリカ・ノースカロライナ大学のパトリック・オニール教授からは、英語のアルファベットの起源についての希有なお話をお聞かせ頂けるであります。

そして午後の研究発表を行われる研究員の方々の新たな研究への眼差しが、今後の研究所の未来への示唆を与えて下さるものと固く信じ、簡単ではありますが、基調報告と致します。ご静聴有り難う御座いました。